

Title	デカルトにおけるエロスとタナトスの一考察：『情念論』第89・90項における「自然設定」をめぐって
Author(s)	黒岡, 浩一
Citation	Gallia. 41 P.1-P.8
Issue Date	2002-03-09
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/6844
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

デカルトにおけるエロスとタナトスの一考察
——『情念論』第89・90項における「自然の設定」をめぐって——

黒岡 浩一

エロスとタナトスは、古代以来、哲学・美学あるいはむしろ文学の底流にあつて、前者は生（あるいは性）の根元的欲望として、後者は前者に付き纏う陰なるものとして、表裏一体をなす二大概念である。また、この2つの言葉は、そのような概念を表す以上に、現代では、超自我（surmoi）の正負両極をなす衝動を含蓄する精神分析学的用語としてのニュアンスを想起させる。したがって、本論の題においたこの2つの用語は、文学作家ではなくまた超自我など認めない「我思惟する cogito」の哲学者を論じる際に、一見そぐなわれないように思われる。ところが、この意識の哲学者は、『情念論』（1649年）第90項（以下、§ 90と略記）¹⁾で、異性への愛の——現代の用語で形容すれば「無意識の」——衝動あるいは欲望の説明を試みる。この意図はその項を結ぶ次の言葉から明らかであろう。

Aussi a-t-il [=le désir qui naît de l'agrément et qui est communément appelé du nom d'amour] de plus étranges effets, et c'est lui qui sert de principale matière aux faiseurs de romans et aux poètes. (PA- § 90 ; AT-XI, 396)

すなわち、§ 90では、文学の主要テーマであり無意識に生じるとみなされがちな異性愛欲望についてのデカルトの解釈が展開されている。さらに、この項と対をなす§ 89では、「蛆虫に触れること、揺れ動く葉の音、その影」などごく些細な出来事から生じる「明らかな死の危険が感覚に示された場合の如き」激しい情動が²⁾、「嫌悪から生じる欲望」の原因として論じられる。デカルトは、そこで、合理的には理解しがたい死への根元的恐怖喚起構造について語っているのだ。したがって、この2つの項は、意識の哲学を否定することにより顕在化した精神分析的なエロスとタナトスの問題に対する意識の哲学からの事前に準備された返答と言えよう。

1) デカルト著作の出典参照は、*Œuvres de Descartes*, éd. C. Adam et P. Tannery, nouvelle présentation par B. Rochot et P. Costabel, Paris, Vrin, 11 vol., 1963-1973 を用い、AT と略記し巻数（ローマ数字）と頁数（アラビア数字）のみを記す。また、『情念論』（PA と略記）について、本論において § の記号とともに示される数字はその作品の第一部から第三部まで通し番号で付されている項番号を示す。

2) PA- § 89 ; AT-XI, 394-395 : « bien que ce ne soit quelquefois que l'attouchement d'un vermisseau, ou le bruit d'une feuille tremblante, ou son ombre, qui fait avoir de l'horreur, on sent d'abord autant d'émotion que si un péril de mort très évidente s'offrait aux sens ».

本論のねらいは、意識の哲学とそれに対抗あるいは反対する思想との対立を論じることにあるのではない。無意識を尊重する思想が意識の哲学からは説明できないものとしてクローズアップしたこの問題をその哲学がどのように説明しているかを吟味し、その説明の是非を問うのではなく、そこから浮かび上がるデカルトの人間観の一端を明らかにすることにある。つまり、今見たように対をなして論じられる「死」と「異性愛」のテーマから捉えられるデカルトの人間の内的構造を考察することにある。ところで、この2つのテーマに関して、デカルトも必ずしも合理的に説明を展開するのではなく、説明原理として「自然の設定 l'institution de la nature」という概念を持ち出す。そこで、まずは、デカルト哲学におけるこの概念を確認しておこう。

I. 「自然の設定」

デカルト生理学によれば、身体における「魂の主な座 le principal siège de l'âme」は、脳の真ん中にぶら下がり、身体に生じるあらゆる運動の影響を被る「小さな腺」(松果腺 la glande pinéale)にある。魂は、この腺に生じた物理的運動(すなわち身体の能動)をその運動に対応する思惟(すなわち魂の受動)として受容する。「自然の設定」とは、この運動と思惟との生まれながらにして結合された対応関係の設定³⁾、すなわち、延長(=物体)と魂との二元実体論の立場を取るデカルト哲学にあって、物理的実体の運動と精神的実体の思惟との対応設定である。この概念は、『世界論』(死後出版、1633年頃執筆[推定])第一章でその用語そのままが用いられることなく仄めかされ(cf. AT-XI, 4)、『屈折光学』(1636年)第六節で明示されて以来(cf. AT-VI, 130)、『省察』の「第六省察」(ラテン語版1641年[cf. AT-VII, 87]、仏訳1647年[cf. AT-IX-I, 69])、仏訳『哲学原理』(1647年)第四部第190項(cf. AT-IX-II, 311-312: 1644年出版のラテン語版にはこの用語はない)を経て『情念論』の第一部まで、変わることはない一貫した内容である⁴⁾。例えば、情念の場合の「自然の設定」を見てみるならば、デカルトは、§36で「恐れ la peur」の情念について、「松果腺の特殊な運動が、自然により、魂にその情念を感ぜしめるように設定されている⁵⁾」と説明する。

3) 『情念論』第一部最終項§50では、「chaque mouvement de la glande semble avoir été joint par la nature à chacune de nos pensées dès le commencement de notre vie」(AT-IX, 368)と説明され、この引用の直後に挙げられる具体例で「自然の設定に従って selon l'institution de la nature」とこの用語が明示される。同じ内容が§44でもその用語の明示なしに述べられる。この二つの項ではともに、本論の考察対象ではないが、「自然の設定」が「習慣 l'habitude」により変更修正可能な場合が言及される。『情念論』第一部でこの用語あるいは概念は三度言及され、この2つの項以外には、下記に見るように、§36である。

4) この点について、またこの概念がデカルト哲学で孕む問題系については、次の論文を参照のこと。P. Guenancia, « l'institution de la nature », in *Lire Descartes*, éd. augmentée, Paris, Gallimard, 2000, pp.320-349. 本論では、以下に述べるように、上記の論文では取り上げられない『情念論』第89・90項におけるこの概念の通常とは異なる用いられ方を問題とする。

5) PA-§36; AT-XI, 357: « de cela seul que ces esprits entrent en ces pores ils excitent un mouvement particulier en cette glande, lequel est institué de la nature pour faire sentir à l'âme cette passion » (souligné par nous).

ところで、デカルトには、この「自然の設定」と似た「自然の教え」という概念がある。この概念は、「第六省察」後半で吟味された概念で、「自然の設定」により思惟として顕れた感覚的知覚が含意する意味作用——具体的には、心身合一体にとってどんな事物が都合がよくどんな事物が有害かを精神に「指し示す signifier」働き——に関わる⁶⁾。『情念論』では「自然の教え」を表す用語は一度しか登場しないが⁷⁾、その概念と「自然の設定」が混同されていることはない。そのことは、両概念が非常に接近する身体的「快樂 le chatouillement」と「苦痛 la douleur」の感覚に関する『情念論』の記述から明らかである。本論では「快樂」の場合について確認しておこう⁸⁾。§ 94 によれば、「快樂」とは、デカルト生理学上、「感覚対象が神経内に引き起こす或る運動で、この運動は、もし神経がそれに対抗するに十分な力を持たないなら、あるいは身体がよい状態にないなら、神経にとって有害であり得るような運動である」。この運動により脳に生じる印象——印象もまた物理的あるいは生理学的運動である——は、「この〔身体の〕よい状態とこの〔神経の対抗する〕力を証すように自然から設定されているので、魂にその状態と力を、身体と合一する限りでの魂に属する善として表象する⁹⁾」。すなわち、この物理的運動あるいは印象が単に「快樂」という感覚（思惟）として対応するのみならず魂に「善」として現れる点で、「自然の設定」はここで意味付与作用にも介入しており「自然の教え」に近づくが、その介入はあくまでも物理的運動または印象と思惟との対応関係の枠内に限定される。他方で、「快樂」は、身体状態と神経の力の証であると同時に、§ 137 によれば、それらの身体的運動を引き起こす感覚対象が身体にとって有益であることを魂に直に告げる唯一の感覚でもある¹⁰⁾。このように表象において感覚対象と関係付けられる時、「快樂」は、それらの対象の有益さを指し示すあるいは告げるのである。この場合、思惟としての「快樂」を介して思惟表象上にある感覚対象の有り様に介入する点で、デカルトは明示していないが、「自然の教え」が問題である。以上のように、「自然の設定」と「自然の教え」の両概念は厳密には区別されている。

6) Cf. AT-IX-1, 66 : les « sentiments ou perceptions des sens n'[ont] été mises [par la nature] en moi que pour signifier à mon esprit quelles choses sont convenables ou nuisibles au composé dont il est partie » ; voir aussi AT-VII, 83.

7) Cf. PA- § 52 ; AT-XI, 372 : « l'usage de toutes les passions consiste en cela seul qu'elles disposent l'âme à vouloir les choses que la nature dicte nous être utiles, [...] » (souligné par nous).

8) 「苦痛」については、下記で「快樂」で確認するのと同じ § 94 と § 137 を参照。

9) « tout ce qu'on nomme chatouillement ou sentiment agréable consiste en ce que les objets des sens excitent quelque mouvement dans les nerfs qui serait capable de leur nuire s'ils n'avaient pas assez de force pour lui résister ou que le corps ne fût pas bien disposé. Ce qui fait une impression dans le cerveau, laquelle étant *instituée de la nature* pour témoigner cette bonne disposition et cette force, la représente à l'âme comme un bien qui lui appartient, en tant qu'elle est unie avec le corps, [...] » (PA- § 94 ; AT-XI, 399 : souligné par nous).

10) Cf. PA- § 51 ; AT-XI, 430 : « l'âme n'est immédiatement avertie des choses utiles au corps que par quelque sorte de chatouillement ».

Ⅱ. § 89・90における「自然の設定」の概念の逸脱

ところが、§ 89・90で「嫌悪 l'horreur」と「愛好 l'agrément」から生じる欲望が説明されるときに導入される「自然の設定」は、今確認してきたその概念の枠を逸脱するのである。その逸脱を見る前に、これら2つの情念の定義を確認しておこう。デカルトによれば、「原初情念 passions primitives」は6つ（驚き l'admiration、愛 l'amour・憎しみ la haine、喜び la joie・悲しみ la tristesse、欲望 le désir）しかなく、その他の情念はそれらの派生型あるいは混合型である。「愛好」は「愛」の、「嫌悪」は「憎しみ」の一種である。§ 85によれば、前者は外部感官により我々の本性に適うと表象されるもの（これをデカルトは「美しい」と定義するのだが）を対象とする「愛」であり、逆に、後者は外部感官により我々の本性に反すると表象されるもの（こちらは「醜い」）を対象とする「憎しみ」である。

デカルトは、この二つの情念は、「そこから生じる欲望の対象となる善や悪ではなく、非常に異なる二つの事柄を追求するように魂を促すところの魂の二つの情動である¹¹⁾」と述べた後に、これらの情動が魂に欲望を抱かせる理由を下記のように説明する。

l'horreur est instituée de la nature pour représenter à l'âme une mort subite et inopinée [...]
(PA- § 89 ; AT-XI, 394)

l'agrément est particulièrement institué de la nature pour représenter la jouissance de ce qui agréé comme le plus grand de tous les biens qui appartiennent à l'homme [...]
(PA- § 90 ; AT-XI, 395)

ここで「自然の設定」が介入するのは、物理的運動と思惟との対応関係ではない。そうではなくて、思惟である「魂の情動」が果たす表象作用に関わっているのである。先に確認した「自然の設定」の概念からの逸脱は明らかであろう。また、ここでの「自然の設定」を「自然の教え」と見なすには少なくとも2つの点で難がある。第一に、今述べたように、ここで問題なのは、感覚対象の知覚ではなく、「魂の情動」である。第二に、これから考察するように、厳密には、「嫌悪」による「突然の予期せぬ死」の表象作用はそのような死の喚起作用と、他方「愛好」の表象作用は対象享受の最大増幅作用と解されるべきである。これらの点で先に見た「自然の教え」が感覚知覚の対象に関して果たすところの有益・有害の意味作用の枠組みを遙かに凌駕している。この逸脱あるいは凌駕をいかに解するかを問うために、これら2つの情念の表象作用について考察する必要がある。

「愛好」と「嫌悪」における「自然の設定」による表象作用の顕現には決定的

11) « cet agrément et cette horreur, [...], ne sont pas le bien et le mal qui servent d'objets à ces désirs, mais seulement deux émotions de l'âme qui la disposent à rechercher deux choses fort différentes » (PA- § 89 ; AT-XI, 394 : souligné par nous).

な相違がある。「嫌悪」における表象作用は、この情念の対象に関わらず、一定して死を喚起することであり、したがって、そこから生じる「欲望」の強さも一定である。他方、「愛好」における表象作用である対象享受最大増幅作用は常に発揮されるものではない。実際、上記の§ 90 冒頭からの引用中に見られる副詞「特に *particulièrement*」の説明として、「愛好」は多種多様で、したがって「愛好から生じる欲望はすべてひとしく力強いわけではない」と付言され¹²⁾、そのような増幅作用が発揮されるのは限られた場合であるとされる。その限られた場合とは「愛好」の対象が異性の場合である。その説明を吟味することにしよう。

Ⅲ. デカルトにおけるエロスの規定のされ方

デカルトは、まず、人間における自然による生物的規定について述べる。

avec la différence du sexe, que la nature a mise dans les hommes ainsi que dans les animaux sans raison, elle a mis aussi certaines impressions dans le cerveau qui font qu'en certain âge et en certain temps on se considère comme défectueux et comme si on n'était que la moitié d'un tout dont une personne de l'autre sexe doit être l'autre moitié, [...]

(*ibid.*)

動物と同様な身体的性の生物的区別とともに、生物的規定として脳に「ある印象」が備えられており、その印象は、「ある年齢、ある時期に」顕在化して、異性がその半分を占めるべき全体の半分でしかないものとして自己を捉えさせる。すなわち、自然による生物的規定が思惟上の自己の有り様を「欠損として」規定するのである。そして、デカルトは続ける。

en sorte que l'acquisition de cette moitié est confusément représentée par la nature comme le plus grand de tous les biens imaginables.

(PA- § 90 ; AT-XI, 395-396)

この引用はすぐさま疑問を引き起こす。この表象作用は、生物的規定による結果として生じる効果なのか、それとも、生物的規定とは別の仕方自然によりなされるのか？「その結果 *en sorte que*」が示すように、前者の場合、すなわち、生物的規定による思惟上（正確には想像力上）の自己表象規定の結果として、「自然により」残りの半分の獲得が想像し得る最大善として表象されると解されるべきであろう。換言すれば、欠損としての自己表象規定とその欠損補充の最大善としての表象作用とは想像力上等価であり、ここでデカルトが「自然により」と明示しているのは、その規定もその表象作用も理性の働きではないことを示すためであ

12) « Il est vrai qu'il y a diverses sortes d'agréments, et que les désirs qui en naissent ne sont pas tous également puissants. » (*ibid.*)

ろう。したがって、この段階では、あくまでも、思惟あるいは想像力上での自然による生物的規定としての印象の展開が問題であり、この展開自体は、「自然の設定」の枠内で把握することが可能である。ここで明らかに、「愛好」が対象享受最大増幅作用をもたらすのは、その情念の自ずからの働きによるものではなく、その情念の枠組みの外側で、すでにその増幅作用が準備されているからである。実際、デカルトは、この内的に準備された増幅表象作用と「愛好」との交差を次のように述べる。

lorsqu'on remarque quelque chose en une [personne] qui agrée davantage que ce qu'on remarque au même temps dans les autres, cela détermine l'âme à sentir pour celle-là seule toute l'inclination que la nature lui donne à rechercher le bien qu'elle lui représente comme le plus grand qu'on puisse posséder ; [...]

(PA- § 90 ; AT-XI, 396)

生物的規定により脳に置かれた印象のもたらす内的な対象最大増幅作用に対して、「愛好」は具体的な対象を提供するだけなのである。換言すれば、「愛好」は、内的なその増幅作用の枠組を借りることによってのみ、§ 90の冒頭で述べられた作用を発揮するにすぎず、「愛好から生じる欲望」もまた「自然が魂に与える傾向性」として魂内に潜在的にあるのである。したがって、「愛好」において「自然から設定されている」対象享受最大増幅作用は、実際には、その情念とは別ものの魂にとって内的な原理を前提とすることなしに生じ得ない。そして、異性への欲望は、つまるところ、生物的規定から説明されていることになる。

ところで、自己が一部をなす全体のもう一部として異性を考えること自体は生物的規定によるが、どのような異性とその一部に適うかということ自体はその規定によるのではない。デカルトは、異性への欲望を「愛好から生じる欲望」のうち「主要なもの」として説明を始めるときに、次のように述べる。

le principal est celui qui vient des perfections qu'on imagine en une personne qu'on pense pouvoir devenir un autre soi-même ; [...]

(PA- § 90 ; AT-XI, 395)

「異性への欲望」を可能とする表象上の枠組みをもたらす生物的規定とは別に、ある人格を「もう一人の自己となり得る」と考え、そしてその人格の中に何らかの完全性を想像することがなければ、生物的規定のもたらした欲望の枠組みの中に該当する対象が与えられることはないのである。したがって、もう一人の自己を限定するためには、同時に自我像とそれに適う完全性とを何らかの仕方で魂が抱いていることを前提としていることになる。なるほどそのような自我像およびそれがもつ完全性とは個人によりさまざまであろう。完全性を人の外見に求める場合には、その完全性を対象として与えるのは外部感覚器官であり、それはまさに

「愛好」の対象であろう。それが§ 90で述べられている場合である。ところで、デカルトによれば、「自己を尊重する正当な理由」はただ一つしかなく、それは「我々の自由意志の使用であり、我々が自らの意志作用に対してもつ支配¹³⁾」である。このような類の完全性をもう一人の自己に求めるとき、それを対象として生じる情感は、外部感官により提示されるものを対象とする「愛好」ではない。そのような完全性は理性の対象であり、それに対する情感はまずは「知的な愛」として顕れ、ついで通常それに伴う情念「愛」が生じることになるだろう。この場合、そこから「欲望」が生じるとしても、それは非常に制御されているはずである。というのも、このような完全性に基づく自己感情が「高邁」であり、この情感こそ欲望を統御する主要な対処法の一つであるのであるから。

したがって、「愛好」から生じる「異性への欲望」の説明は確かに生物的規定に基づいて展開されるのであるが、その規定により画定されるものが欲望構造の枠組みのみで、その対象が無規定のまま残され、その無規定部分を決定することが魂が持つ自己の完全性の基準に委ねられているのである。このことにより、自然による幾つかの規制にもかかわらず、デカルトにおけるエロスは魂がもつ己の完全性の概念に基づき展開されることが可能となっているのだ。

IV. デカルトにおけるタナトス

「愛好」における「自然の設定」が実際には生物的規定であるのであれば、それと対をなす「嫌悪」についても死の喚起作用が生物的規定と考えられるのではないか？ そうかもしれないが、デカルトがその点について説明をしない以上、不明なままである。問題は、なぜデカルトは、「自然の設定」の通常概念を逸脱してまで、死の喚起作用を情念「嫌悪」の内部の固定された原理として提示したか、ということである。

デカルトは、物活論 *vitalisme* を否定して、§ 5で次のように述べる。

Et ainsi on a cru sans raison que notre chaleur naturelle et tous les mouvements de nos corps dépendent de l'âme, au lieu qu'on devait penser au contraire que l'âme ne s'absente, lorsqu'on meurt, qu'à cause que cette chaleur cesse, et que les organes qui servent à mouvoir le corps se corrompent. (PA- § 5 ; AT-XI, 330)

デカルトにとって死とは、身体の熱の消失あるいはその諸器官が損なわれるが故に身体から魂が不在になることである。『省察』において最初の意図では「魂の不滅性」を証明しようと考えていた哲学者は、「死は決して魂の欠如によって生じるのではなく、ただ身体の主要な部分のいずれかが損なわれること故に生じるので

13) PA- § 152 ; AT-XI, 445 : « Je ne remarque en nous qu'une seule chose qui nous puisse donner juste raison de nous estimer, à savoir l'usage de notre libre arbitre et l'empire que nous avons sur nos volontés. »

ある」と考えるのである¹⁴⁾。これゆえに、魂は、なるほど死に至る可能性のある出来事を予測したり想像したりすることができるかもしれないが、死そのものの到来の可能性を現実を知るのは身体感覚を介してのみである。この点で、死に関わることは実質的には身体に委ねられている。したがって、デカルト哲学においては、死への根元的恐怖すなわちタナトスは、理性に基づくことなく、常に身体に依存する情念という仕方で喚起されるしかないのだ。

☆ ☆ ☆

デカルトでは、異性への欲望すなわちエロスは、生物的規定により発露するのであるが、その対象決定には魂の自己像に基づく完全性の基準が関与する限りで、各々の魂の有り様により多様な形態を採りえ、理性に基づき展開されることが可能である。他方、死への恐怖であるタナトスは身体が情念により促す仕方ではしか発現しない。それ故、理性が死を捉えるとき、献身的な愛のために (§ 83)、名誉のために (§ 173)、魂が死へと身を投じることが讃えられるのである。

デカルトにおいて、情念はすべて心身合一の地平に属する現象である。しかし、「愛好」と「嫌悪」という対をなす情念について見てきたように、心身合一の地平での情念の発露の有り様は一様ではない。すなわち、その地平は、身体による規定と魂による規定という重複した多層構造になっている。当然、この多層性は、デカルト哲学では、心身合一という見地と同時に、それと背反する心身分離という見地があることに起因する。そこからして、その多層構造をできるだけ明らかにする試みが、逆に、その2つの背反的な見地が併存する有り様を、すなわちデカルト的人間観を探索する一つの有効な手だてとなるのである。

(パリ第IV大学博士課程在学中)

14) « la mort n'arrive jamais par la faute de l'âme, mais seulement parce que quelqu'une des principales parties du corps se corrompt ; [...] » (PA-§ 6 ; AT-XI, 330).